乳幼児を持つ父親の成育歴と育児行動

高橋　陽香（G130002）

指導教員：安念 保昌・大久保 義美

キーワード：父親，子育て，　成育歴

はじめに

専業主婦が一般的である時代は、子育ては母親が行うことが当たり前とされてきたが、近年、共働き家庭が増加し、男性の育児参加が期待されるようになってきた。しかし育児に関して夫婦の認識はずれているようだ。宮木(2014)によると、「子育てには父母間のギャップがあり、父親は母親の子育てに対し『満足している』と 81.7%が回答している。一方で母親から見た父親の子育ては 62.9%しか満足していないことが分かっている」と述べている。イクメンが増え、男性が子育てにかかわることについてのイメージは変化しつつあるが、女性からすると満足できる状態ではないようだ。また、多くの男性は「自分(父親)は出来る範囲でやっていると思うのに、妻(母親)はそれを認めてくれない」と言っている。（宮木 2014)しかし、女性から見た男性の子育て満足感が低いことから、男性の“できる範囲”は女性からすると程度が低いのではないか。

現在の育児に大きく関係する事柄のひとつとして、父母の成育歴が関与している可能性がある。成育歴が良ければ、現在の育児も積極的に取り組むことができるのではないか。

研究１

目的

本研究の目的は、家庭における育児がストレスなく遂行されるにはどのような促しが必要かを探索的に検討する。

方法

豊田市のＡ幼稚園の保護者 305 名、Ｂ幼稚園の保護者 213 名計 519 名に質問紙調査を実施し、結果を分析した。

質問紙の構成:子育て観について(子ども観尺度　11 問)、生育歴について(親の養育態度尺度・親子関係認知尺度 17 問)、現在している育児について(Benesse 次世代育成研究所「乳幼児の育児の父親についての調査報告書」2009 を参考に 11 問)、子どもの態度について(17 問)の計 56 問を 4 件法で行った。

父母の成育歴、子育て観、子どもへの態度それぞれの質問項目に関して、プロマック回転を伴う主因子法因子分析を行った。

結果と考察

成育歴においては、受容、しつけ、子どもの言いなりの 3 因子が見いだされ、子どもへの態度においては、受容、しつけ、子どもの言いなりの３因子が見いだされ、子育て観においては、自己成長・責任、専業主婦、無関心の３因子が見いだされた。

父母の生育歴の３因子を独立変数とし、子育て観、子どもへの態度のそれぞれ３因子を従属変数とする、ステップワイズによる重回帰分析を行った。その結果、子どものころに受容されたと思っている父親は、自分の子どもに対しても受容する傾向が認められ、子どものときにしつけをされたと思っている父親は、自分の子どもに対してもしつけをする傾向がある。(図 1)

母親は子どものころに受容されたと思っていると、子育ては責任あるもので更に自己成長するものと思っており、子どもに対してしっかりしつけをする傾向にある。子どものころにしつけをされたと思っている母親は、まず子どもを受容する傾向がある。子どものころ、自分の言いなりに親が育ててくれた母親は、子育てには無関心となるが、子どもは受容する傾向が見られた。(図 2)

男性は、自分の受けた成育歴をそのまま、子どもへの態度に反映させているが、女性は必ずしも成育歴のまま育児をしているわけではないことが分かった。それは、親から受けた養育を参考にしつつも、自分でネットや雑誌、自分の親やママ友の話などから情報を集め、自分が良いと感じたことと、良くないと感じたことを自分なりに考え育児をしているのではないかと考えられる。

研究２

目的

父母の育児に対する意識や行動にどのような違いがあるかを検討する。

方法

父母の成育歴を高中低に分け、９通りの組み合わせをつくり、その組み合わせごとの夫婦の現在の育児と認識のずれ(父親の得点-母親の得点)について、父親と母親の２要因参加者間分散分析を行った。

結果と考察

現在の育児の叱責に関して、父親の成育歴の主効果が有意となり、父親の成育歴が中程度であると、父親の叱責は母親の評価以上であるが、父親の成育歴が低いと、父親の叱責は母親の評価以下になることが分かった。(図 3)

子どもへの受容に関しては、父母の成育歴の交互作用が有意となり、下位検定の結果、母親の成育歴が低程度のとき、父親の成育歴が高程度であると、父親の受容は母親の評価以上であり、父親の成育歴が中・低程度であると、母親の評価以下になる。(図 44)一方、子どもへのしつけに関しては、父親の成育歴の主効果が有意となり、父親の成育歴が高程度であると、母親の評価以上であることが示された。(図 5)

このことから、男性は自分が受けた養育が現在の育児に大きく影響する為、生育歴が高いと自分が受けた養育そのままで満足してしまうと推測される。目の前にいる自分の子どもにはどんな養育が向いているかということや、妻はどのような子育てをしていきたいか、ということを考えず、自分が受けた養育を自分の子どもに行うことで「自分は十分良い育児をしている」と思ってしまうのではないかと考えられる。

家庭における育児がストレスなく遂行されるためには、父親の生育歴得点が高い場合、受けた成育上の経験を同じように子どもに与えるのではなく、目の前にいる自分の子どもにはどんな養育が向いているか、父親が「母親と同じ立場」で育児することを意することで、夫婦のずれの解消が図れるのかもしれない。

そのために３つのことがいえると考えられる。1 つ目は、経験以外の知識をつけること。2 つ目は、新しく得た知識を含め、パートナーと十分に話し合うこと。3 つ目は、母親が父親を信頼して育児を任せることである。

引用文献

宮木由貴子(2014)「父親の子育てに関する一考察―30 代・40 代の父親の子育て状況と母親の意識」LifeDesign REPORT Spring 2014,4

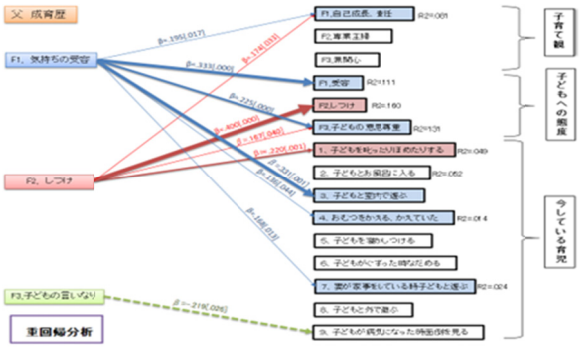

図１．父親の成育歴の子育て、態度、育児への影響

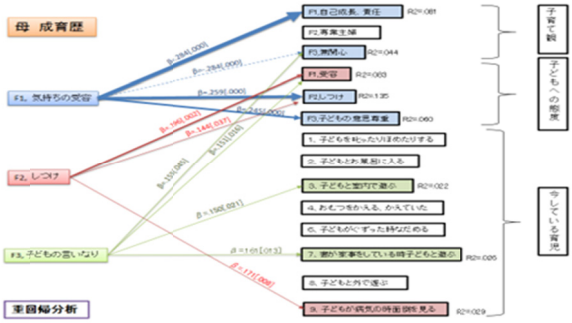

図２．父親の成育歴の子育て、態度、育児への影響

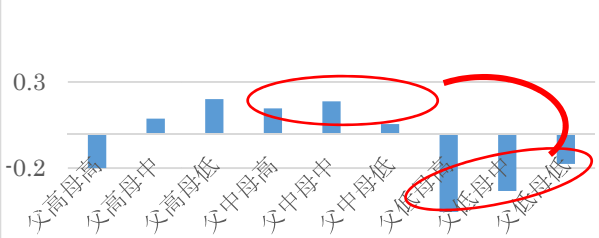

図3.　子どもを叱ったり、ほめたりする

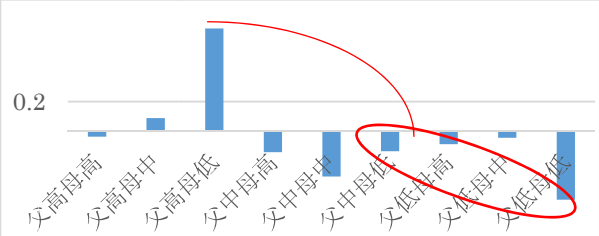

図4.　子どもへの態度　受容

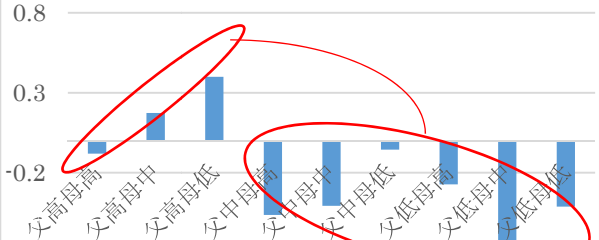

図5.　子どもへの態度　しつけ